

<b>平成 30 年度がん教育総合支援事業 がん教育推進校実践報告</b>	<b>【実践テーマ〈キーワード〉】</b>
	がんの疾病概念や予防について、正しい知識を身に付けることができる。 〈キーワード〉 医師・がん経験者による講話
<b>鹿追町立鹿追中学校</b>	
<b>学級数：6（5）学級 生徒数：152 人</b>	

## 1 はじめに

本校では、保健体育科保健分野の授業で、「生活習慣病」や「喫煙の害と健康」「飲酒の害と健康」「喫煙・飲酒・薬物乱用の要因と適切な対処」の学習を通して、がんにかかるリスク等の指導をしてきている。

日本人の死亡原因として最も多いがんについて、正しい知識を身に付けるとともに、がん患者への共感的な理解を深めることにより、主体的に命の大切さや自己の生き方について考える力の育成につながると考え、事業を推進することとした。

## 2 実践

### (1) 保健体育科における基礎知識の定着（2・3 学年）

2 学年及び 3 学年において、保健体育の教科書を用いて、がんに関する基礎的な知識の定着を図る授業を実施した。

### (2) 医師・がん経験者による講話（2・3 学年）

① 帯広厚生病院消化器外科主任部長の村川氏による講話を実施し、がんの種類や治療方法、治療の実際についてお話しいただいた。講話の最後に、生徒からの質問に答える時間を設定した。



② がん患者・家族の支援会 enn の古城氏を講師に、自身の経験から、がん患者がたどる心のプロセスや、がんについて理解することの意義及びがん罹患してもできる限りそれまでと変わらない生活をするこの大切さについて講話を行った。講話の最後に、生徒からの質問に答える時間を設定した。



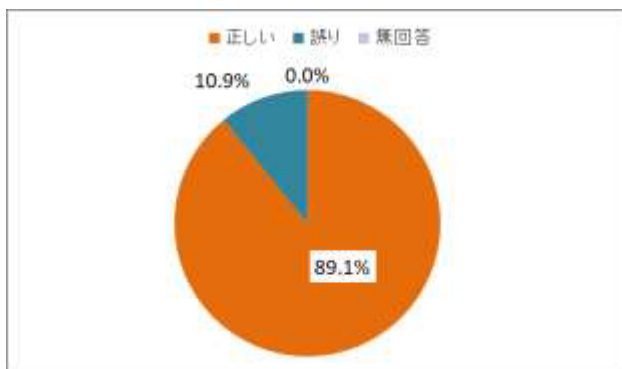
### 生徒の感想

- がんという病気が身近なものだと感じた。また、がんにかかることが、死に直結するわけではないこともわかった。
- 病気や障がいをもつ人との関わり方（自分のできること・すべきこと）について再確認することができた。
- 生きるということは、自分一人の力ではなく、家族や地域からの支えが不可欠であることを、改めて考えることができた。
- 日常からの食習慣、生活習慣をよいものにする心がけが重要だと感じた。
- 健康や体調についての変化や、自己管理に対する意識を高め、家族への相談や健康診断等とおした早期発見・早期治療の大切さを知った。
- 一日、一瞬を大切に、悔いのない人生を送りたいと強く感じた。

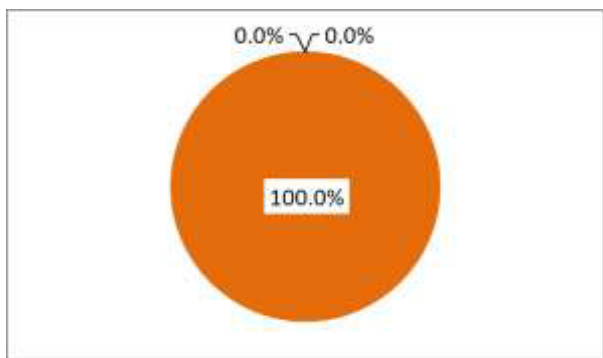
### 3 生徒アンケートの結果

○ 早期発見すれば、がんは治りやすい。

(実施前)

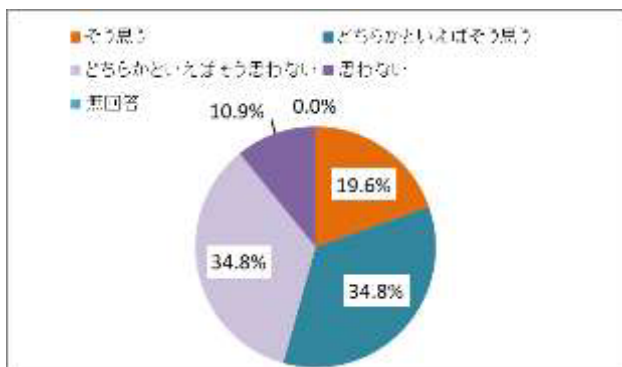


(実施後)

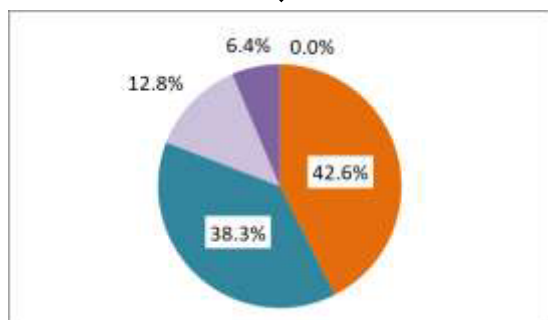


○ がんになっても生活の質を高めることができる。

(実施前)

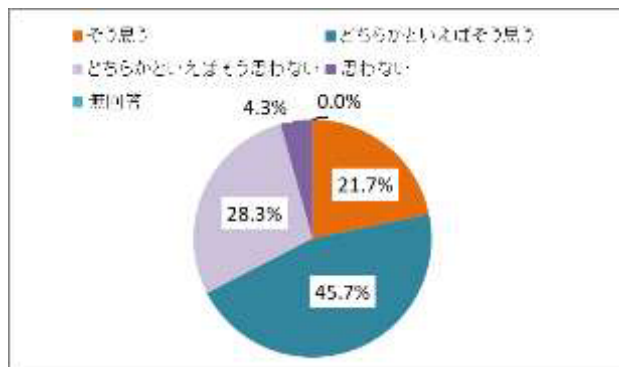


(実施後)

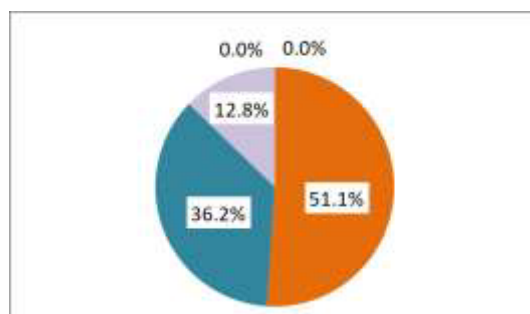


○ がんと健康について、まずは身近な家族から話ろうと思う。

(実施前)



(実施後)



### 4 実践の成果と課題

○ 成果 ○

多くの生徒が、身近な人ががんになるという経験をしていないが、医師やがん経験者の話を聞くことにより、「自分の身の回りがん患者がいたら」という視点や、「自分ががんになったら」という視点でがんについて考えることができ、自分や家族のこれからの生活をよりよいものにしていこうという意識が高まった。

● 課題 ●

現行学習指導要領では、生活習慣と関連付けてがんについて学ぶこととなっているが、生活習慣と関係のないがんもあるため、新学習指導要領の内容を取り入れて、正しい知識の習得を図る必要がある。

また、現在の生活習慣が将来の自分の健康と深くかわることに気付かせるような指導の工夫が必要である。